

## 浪岡と青森のきずな

### 天狗登場

8月23日に善知鳥神社で開催された楽市楽座を見に行く途中、新町を闊歩したのち境内に入っていく天狗に遭遇しました。足駄をはき、神楽を舞うような衣装を身につけ、堂々たる高い鼻はまぎれもなく天狗そのものでしたが、浪岡町史編さんの過程でも見かけた記憶がありました。

『浪岡町史』全6巻をめくりながら、「これだ」と見つけた写真は、昭和13年（1938）に浪岡八幡宮県社昇格時の記念絵葉書でした【写真1】。「浪岡八幡宮御神輿渡御」と題された絵葉書は、八幡宮を出発し、当時のメインストリートであった茶屋町・仲町・下町を通り、浪岡駅までの往復を撮影したもので、12枚セットで各家庭に大切に保管されていました。写真中央に天狗の堂々たる姿があります。

さて八幡宮県社昇格の2年後、昭和

【問合せ】  
市史編さん室 ☎ 017-732-5271



【写真1】浪岡八幡宮御神輿渡御（『浪岡町史』別巻IIより転載）

15年紀元節（現在の建国記念の日）の前日に、浪岡城跡は県内初の国史跡となり（2月10日）、浪岡村は6月1日から町制を施行しました。当時の新聞は、一面に「浪岡村の躍進」の見出しで村から町への移行を報じ、ここに現

在の「中世の里・浪岡」の礎が作られることになりました。

### 浪岡八幡宮と青森

浪岡地域の中心的な神社は浪岡八幡宮です。浪岡城主北畠氏は、京都を模して城の四周に加茂・八幡・春日・祇園（広峰）の社を配したとする伝説があるように、神社仏閣は城下町の重要な要素です。なかでも浪岡八幡宮は、延暦12年（793）坂上田村麻呂創立と伝えられ、弘前藩2代藩主津軽信枚が慶長19年（1614）に再建した時の黒漆塗りの棟札（市指定文化財）が残る、由緒ある鎮守の杜です。

明治期に八幡宮の神官であり、浪岡村の初代村長を務めた阿部文助は、浪岡城や北畠氏の顕彰に尽力し、郷土史研究者の重鎮でもありました。文助の長男・政太郎は、その名のごとく政治を志し、大正6年（1917）青森師範学校同窓の工藤卓爾青森市長の後を受けて、第7代市長に就任しています。青森と浪岡の近代的な結びつきは、ここから始まったと言ってもいいでしょう。阿部政太郎の事績は多々あるものの、八幡宮境内に残る「頌徳碑」が簡潔に表現しています。

（前略）大正六年以後、選れて青森市長たること二回、此の間、種々な



【写真2】阿部合成（左）と父政太郎（『阿部合成展』図録より転載）

る難局に処して治績を挙げ、画策計営する処すこぶる大なり（後略）

### 政治から芸術へ

政太郎の五男が画家・阿部合成です【写真2】。合成は明治43年（1910）9月に生まれています。5月にハレー彗星が地球に接近したこの年、浪岡地域では8月に津川武一（医師・小説家・政治家）が、そして10月には合成の従弟にあたる「大地の画家」常田健が出生しています。

合成は、父政太郎の市長就任とともに青森に転居し、橋本小学校に入っています。青森中学校（現青森高等学校）では作家太宰治となる津島修治と同級であり、ともに文学青年でしたが卒業後、津島は旧制弘前高校へ、合成は京都市立絵画専門学校で絵画に専念



【写真3】『阿部合成展』図録表紙

することにになります。京都絵専を卒業して野辺地中学校の教員になった頃、昭和9年(1934)に父政太郎が逝去します。その時の心境を親友であり『幻の画家阿部合成と太宰治』の著作がある黒田猛への私信で吐露しています。

とうとう僕は父を失った。(中略)僕は父の死と同時に絵に対する自負、心の大半を喪失しかけている。(中略)僕の二十五年の生活は、その大部分が父に負うところのものであったことを今にして板を覆うて始めて感じる。

父に対する感謝あふれる文章です。

## 合成と健

昭和13年、二科展に出品し入選を果

たした合成の代表作『見送る人々』は、後に反戦画のレッテルをはられ、合成自身も公募展から決別する契機となった作品です。生まれ育った浪岡八幡宮の県社昇格の年と重なることも何かの因縁でしょうか。

合成は昭和47年(1972)、62歳で逝去しており、同54年6月には青森市民美術展示館で遺作展を開催するなど逝去後に画家としての評価は一層高まります。

そのような中、平成7年(1995)5)生誕85年を迎えた合成の展覧会が生誕の地である浪岡町中世の館で行われました。展覧会の副題は、町村合併40周年記念となっており【写真3】、昭和29年(1954)に浪岡町と合併した大杉・五郷・野沢・女鹿沢の各村が一人の画家を介して一体となった印象を受けました。

合成と同じように油絵に励んだ従弟の常田健は、地道に作品を積み重ね、平成9年に県文化賞を受賞した後、土蔵のアトリエで描き続けた「大地の絵」を広く世に出すこととなります。合成より30年近く長生きする健も平成4年に中世の館で、そして同11年には東京ギャラリー・悠玄で個展を開催し、その画業は「ニュースキヤスター 筑紫哲也」などから「大地の画家」と評されるようになります。そして現在は、市内昭和通商店街が健の応援隊となってい

ます。

ところで健は、昭和41年(1966)、56歳の時、カネ長デパートで初めての個展を開催していますが、この時合成は、健への手紙の冒頭に、「わがアタマン、個展を終わって(中略)万才を送ります。」と書いています。

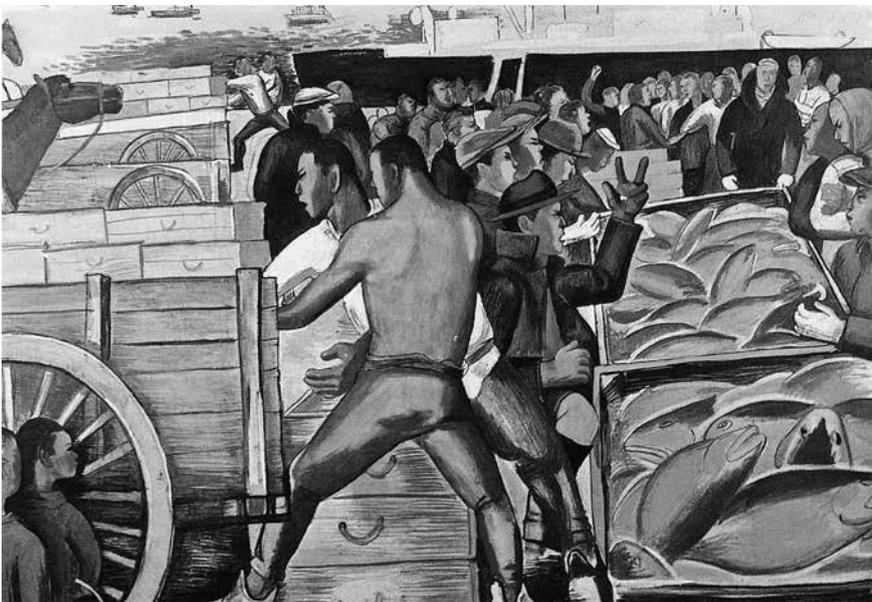
## 二人の原点

合成がアタマンと言っているのは、二人が昭和9年に結成したグレル家という青春の思い出を指しています。この時、合成はアタマン・ゴウセイ・ニン・グレル、健はケンチャロフ・ダ・グレルとロシア的な名前をつけて、絵のサインにまでしています。アタマンとは「あたま(頭・かしら)」の意味であり、健より先に生まれた合成が称することに違和感はありませんが、合成が健をアタマンと言うのは、健の絵に対する尊敬の現われと考えられます。

現在、県立郷土館が収蔵し、合成と健の二人が描いたとされる「海の群

像」は、青森の港で働く人々を描いたもので、二人の絵画形成の基盤を示す作品です【写真4】。くしくも、この作品は青森の阿部家土蔵という二人が過ごした空間の中で描かれ、青森市長であった阿部政太郎が逝去した年に完成した青春譜そのものでもあったのです。合成と健の絵画の原点は、港町・青森にありました。

(元浪岡町史編集委員 工藤清泰)



【写真4】海の群像5 魚市場の風景(青森県立郷土館蔵)